

平成 30 年 6 月 14 日現在

機関番号：13103

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26350040

研究課題名(和文) 幼児の食事場面における生活文化の共有過程に関する実証的研究

研究課題名(英文) The empirical study on the process in which children share the living-culture in the meal time

研究代表者

吉澤 千夏 (YOSHIZAWA, Chinatsu)

上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：10352593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、3歳～6歳までの幼児の幼稚園での食事場면을縦断的に観察し、幼児の生活文化の共有過程とそれに対する保育者のかかわりについて明らかにすることを目的とする。

研究の結果、年少時の幼児の食事は、保育者から助けを受けつつ、「食」中心の時間から文化的な時間へと変化することが推察された。年中時では、発話内容が食べることから、食べること以外を含むものへと変化することが示された。年長時には、食べることに関する多様な話題を共有し合い、「食」をポジティブに評価する会話が多くなることが示唆された。一方保育者は、幼児の発達に伴い、幼児への発話が減少し、食事場面が幼児中心に展開することが示唆された。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is as follows: 3 to 6-year-old children are observed longitudinally in their meal scenes at pre-school, and it is to clarify how children share their living-culture and how their pre-school teachers influence on them.

As the result of observation for over 10 children and teachers in 3 years, the following were clarified. It was inferred that the meal scenes of the 3-year-old children change from "eating" time to cultural time with the help of teachers. The contents of utterance in the early time of 4-years-old children were observed "eating" in many cases, and they also talked about other than "eating" in the latter time of 4-years-old. 5-year-old children shared diverse topics related to "eating", and they evaluated "eating" as "delicious" etc., positively. On the other hand, the utterances of the pre-school teachers gradually were decreased, and it was suggested that the children take the initiative in the meal scene with the development of young children.

研究分野：保育学，児童学

キーワード：幼児 食事場面 生活文化 共有過程

1. 研究開始当初の背景

生活文化とは、人間が生活環境に影響を受けながら、繰り返し行い、形成してきた、生活の場における共通概念(吉澤 2005 等)であり、我々の生活の至るところに存在している。なかでも食は、出生後間もない乳児でさえも、反射的哺乳によって本能的に摂食行動を行うこと等から、我々にとって欠くことのできない営みであり、生物学的にも社会的にも重要かつ普遍的な意味を持っている(今田 2005)。

生活文化の多くは、主たる養育者を始め、周囲の他者との社会的なかかわりの中で獲得され、共有されていくことが知られており(Valsiner 1987)、世代から世代へと文化的に繰り返し伝えられる(Lupton 1996)。つまり、文化的に新参者である子どもは、熟達者たる大人が形成する社会文化的共同体に参加することによって、次第に文化的に熟達していくといえる(Lave & Wenger 1991)。食に関する一連のプロセスや道具の操作、誰とどのようにして食べるか等、生活集団の持つ共有概念に沿った行動の獲得・共有は、次世代たる子どもたちがその生活集団に適応し、その場の人とかかわり合いながら、生活することを可能にする。個々人が生活している歴史的・空間的な場が内包している意味(箕浦 1990)の体系である生活文化を獲得・共有することは、子どもたちが自らの生きる社会において、その一員となることを意味している。

これまで、生活文化を捉える概念の1つとして、「日常的に行われる活動の時系列の手順に関する知識(Schank and Abelson 1977)」を意味するスクリプトを採用し、その表出により展開されるままごと遊びを観察の枠組みとして研究(吉澤等 2001 他)が行われてきた。3歳児はすでに大人とほぼ同様の基本的なスクリプトを獲得している(Nelson and Seidman 1984 等)ことから、スクリプトの獲得・共有過程を捉えるために、1歳~3歳時までの幼児のままごと遊びの縦断的観察を行った(吉澤等 2001, 2008, 2009 等)。その結果、子どもの食に関するスクリプトは、日常生活の主要行為に関する知識を獲得した後に、調理や供給といった食にかかわる手順に関する知識を得て、より文化的・社会的意味を有するマナー等にかかわる知識が獲得されることが示された。さらに、スクリプトの共有過程は、行為の共有に始まり、言語を媒介としたイメージの共有により多様なスクリプトが共有されていくことが示された。この一連の研究は、幼児の生活文化獲得が日々の生活になじみ深い行為から、より社会的・文化的な発話・行為へと移行する順序性を持つことを示唆している。

さらに、主だったスクリプトを獲得した幼児は、生活の場としての集団保育の場において新たな生活文化に触れ、それぞれの幼児が獲得している生活文化をより広範囲のコミュニティ内で共有し合うと考えられる。

3歳児以降のままごと遊びは日常生活のイメージを離れ、よりファンタジックな展開をするようになる(Vygotsky 1966)ことから、3歳児以降の生活文化を捉える方法としてのままごと遊びには限界がある。そこで本研究は、生活文化の共有過程を捉えるために、幼児の実際の食事場面に注目し、生活文化がいかに共有されていくのか、その過程を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の目的

本研究は、主だったスクリプトを獲得していると考えられる3歳児を対象とし、幼児が他の幼児とのかかわりの中で互いの生活文化を共有する過程と、その過程に関わる保育者の役割について、縦断的観察を通して明らかにすることを目的としている。その目的を達成するために、年少児(3歳児)が年長児(観察終了時は6歳)になるまでを対象とし、食事場面の縦断観察を行い、以下の3点を明らかにする。

(1) 幼児の食事場面(昼食)において表出される生活文化はどのようなものかを明らかにした上で、対象児が他の幼児とどのような発話・行為を通じてそれらを表出し、互いに共有していくかを捉える。

(2) 上記の食事場面において、保育者がどのような発話・行為によって子どもたちに関わっているのかを捉える。

(3) 3年間にわたる縦断データにより、幼児の生活文化の共有過程と幼児の発達に伴う保育者の役割の変化の過程を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者：N県内の幼稚園に在籍する年少児(3歳~4歳)とその担当保育者2名を対象とし、その幼児が年長児(5歳~6歳)になるまでの3年間にわたり、縦断観察を行う。途中、転園等があったため、対象となる幼児は、年少時は14名、年中時(4歳~5歳)は16名、年長時は18名である。

(2) 観察期間：2014年5月~2017年3月の3年間、夏休み中である8月を除いて、月に1回、計32回の観察を行う。分析対象としたのは、いずれも給食場面である。

(3) 観察方法：対象児の幼稚園における昼食時の会話について、映像及びICレコーダーにより記録する。対象児は昼食時、4~5人のグループに分かれて昼食をとっており、その際の幼児及び保育者の発話について、トランスクリプトを作成する。そのトランスクリプトを基に、対象児の会話のテキスト分析を行う。これにより、幼児及び保育者の会話の特徴及び食事場面における会話の発達の变化を捉える。

4. 研究成果

(1) 年少時の幼児と保育者による食事場面における発話

年少時の幼児の食事場面における発話内

容等について分析を行った結果、以下の点が明らかになった。

3 歳児の食事場面においては、「食べる」「飲む」ことそのものに関する会話を中心である。

当初、「食べる」「飲む」ことに関する会話が多くなされるものの、対象児の発達に伴い、その日の食材に関する話や、食事そのものとは関係のない、遊びに関する話などがなされるようになる。

上記に対して、当初は保育者による発話の開始が多くみられるものの、年少時後期になると、子どもたち自身の発話による会話が展開されるようになる。

(2) 年中時の幼児と保育者による食事場面における発話

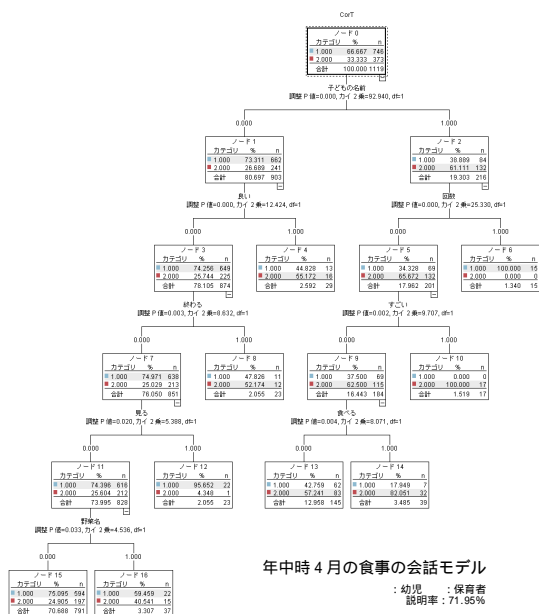
年中時の幼児の食事場面における発話内容等について分析を行った結果、以下の点が明らかになった。

食事時の発話では、幼児の発達に伴い、保育者よりも幼児の方が有意に発話の割合が増加する。

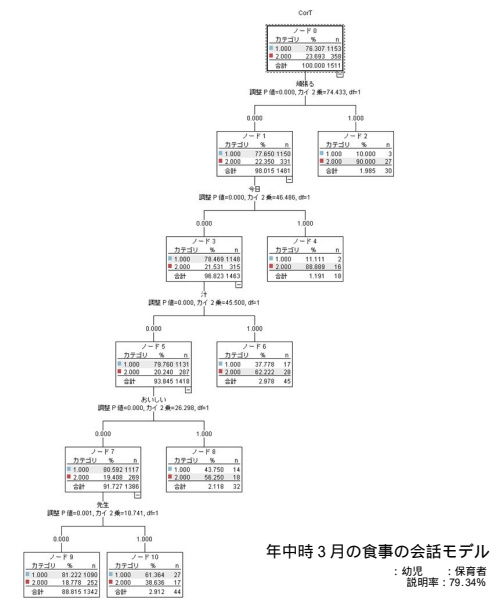
発話で表出されるキーワードをカテゴリー化し、その出現数をみると、年中時の昼食場面においては、「食べる」ことに関する会話がその中心をなしているといえる。

各観察時に表出されるカテゴリーは、全般を通して、互いの名前、食べ物や「食べる」ことそのものについて、多く出現している。一方で、発達に伴い、「食べる」こと以外のカテゴリーに属す発話も多くみられるようになる。

幼児と保育者の発話状況についてみると、幼児よりも保育者の方が「食べる」ことを促し、評価する発話、食べ物の名称やそれを「おいしい」と意味づける発話などが多くみられる。一方で、幼児は年中時当初は「食べる」ことや他者への注意喚起(「みて!」)が多くみられるものの、



年中時後期になると「食べる」こと以外の発話が増加する。



(3) 年長時の幼児と保育者による食事場面における発話

年長時の幼児の食事場面における発話内容等について分析を行った結果、以下の点が明らかになった。

食事場面における発話数は、保育者よりも幼児の方が多い。また、幼児の発達に伴い、全体の発話数に対する幼児の発話数の割合が増加することから、年長児の食事場面においては、幼児が主となって、会話を展開しているといえる。

年長児と保育者の食事中の会話中に多く出現するのは、「幼児の名前」「食べる」「食材の名前」「うん(あいづち)」であり、食事場面の会話において、互いの名前を呼び合い、食材について言及しながら、食べることに話題を共有し合っている様子がうかがえる。さらに、「いい(良い)」「おいしい」といった発話も多く表出していることから、「食べる」ことをポジティブに評価する会話が多くなされていると考えられる。

幼児の発話に注目すると、年長初期には、「食材の名前」「おいしい」「おかわり」のように、食べることにに関する発話が多くみられるものの、最終的には、「今日」「最後」「私」「待つ」のように、目の食以外の発話や、食べ終わることとそれに対して他児が待っているということを発言するようになることが明らかになった。これに対して保育者は、「何で」と幼児に問いかけ、「終わる」「最後」のように食べ終わることや「待つ」幼児がいることに言及するようになることが示された。

発話の例

2016.04

C: タケノコ, おいしーっす。
C: タケノコ, やわらかかったですね。
T: ですね (笑)。
C: やわらかー。
やわらかいです。
でもタケノコ, ちょっとおっきいのは硬いです。
これを使うと, 歯がきれいになるんです。

2016.10

C: じゃあ, 僕が, うんと,
一番大嫌いな食べ物
大好きなやつ,
何でしょう?
C: え? 一番大嫌いな。
T: 今のクイズは難しいよ。
僕が一番大嫌いな, 大好きなものは何でし
ょうかって言ったよ。
C: 普通な, 普通なやつかもしれない。
C: ピーマン?
T: これは難しいね。
C: ああ, 正解, ピーマン。
C: Rちゃんピーマン大好物。
C: 僕も僕も。
C: ひょっとしてKIちゃん, 大嫌いなものの中
でも
一番好きなものって言った? そうなの。
C: あとパブリカと。

2017.03

C: 肉団子おいしい。
T: これが最後だよ,
KIちゃん, 今日でみんな給食は終わりです。
C: そうだよ。
C: あ, 最後って書いてあった。
T: 味わって残さないで食べてね。
まあ, 美人になりたい, 美人になりたい人は
野菜まだいっぱい残ってる。
C: KY君かわいそう。
だってさ, 一番最後のさ, 給食食べないんだ
って。
KY君かわいそうだよね。

(4) 考察

幼稚園に在籍する年少時の幼児にとって, 友だちと共にとる給食は, これまでの食事場面とは異なる体験である。入園当初, 自分だけで完食することが困難だった幼児たちは, 保育者からの助けを受けて, とにかく食べることに集中した昼食時間を過ごしていたと考えられる。しかし, 発達に伴い, 食べることはもちろんのこと, 食材に関心を向けたり, 昼食前後の遊びに言及したりするなど, 食事時間が食べるだけではない, 文化的な時間へと変化していることが推察される。

このような傾向は年中時の幼児においてもみられ, 食事場面における会話は, 「食べる」ことに関する内容から, 「食べる」こと

以外を含む内容へと変化していた。これに対して保育者は, 幼児が「食べる」ことを促し, それを評価する発話, 食べ物の名称やそれを「おいしい」と意味づける発話などを行う傾向が認められる。

さらに年長時になると, 幼児は食事場面の会話をリードし, 「食べる」ことに関わる多様な発話がなされるとともに, 保育者に比して少ないものの「おいしい」「いい(良い)」というような, 食事をポジティブに評価する発話が多数表出されていた。この段階の保育者の発話数については減少する傾向にあることから, 幼児が食事場面で多様な発話が可能になるに従い, 保育者は自らの発話を控えていることが示唆される。

以上のことから, 幼児期の食事場面は, 幼児がまず「食べる」ことそのものに集中し, それを保育者が促すような発話を中心である段階から, 幼児が「食べる」ことを含む多様な発話を行うとともに, それを保育者が社会的・文化的に意味づける段階へと移行し, さらに幼児自身が食事場面での会話の中心となり, 自ら食事の社会的・文化的意味付けを行う段階へと変化することが示唆される。

このことは, 保育の場における食事が, 幼児にとっても保育者にとっても, 栄養摂取を果たす場として始まることを意味するものと考えられる。そして, 幼児自身の「食べる」行為の自立が図られると, 幼児は「食べる」ことのみならず, 「食べる」以外の発話も増加していく。これに対して保育者は, 幼児の食の自立の様子を捉え, 「食べる」を「おいしい」と意味づけることで, 栄養摂取の場としての食事場면을社会・文化的な場面へと変化させていく役割を担っている。さらに幼児が多様な会話を展開するようになると, 保育者による発話は減少している。このような現象は, これまでの母子のままと遊びの分析(吉澤等 2001 他)においても観察されており, 養育者同様保育者も, 子どもの生活自立に伴い, その関わりを変化させているといえる。保育者のこういった関わりは, 幼児の生活文化の共有を支え, 幼児が生活文化の担い手になっていくことをサポートする意味を持つと考えられる。

本研究で得られたデータは膨大である。今後これらデータを生かし, さらに研究成果をあげられるよう, 丁寧かつ詳細な分析を行う予定である。

最後に, 3年間にわたり研究にご協力くださった幼稚園の子どもたちと先生方に, 心より感謝申し上げます。

5. 主な発表論文等

(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 3 件)

吉澤千夏・上村佳世子 4歳児は食事中にどのような会話をするのか 日本家政学会第69回大会 2017年5月26~28日 奈良女子大学

Chinatsu YOSHIZAWA What are 3-year-old children talking about during the lunch time? ARAHE 19th Biennial International Congress 2017年8月6日~10日 東京 国立オリンピック記念青少年総合センター

吉澤千夏・上村佳世子 幼稚園年長児の食事場面における会話 日本発達心理学会第29回大会 2018年3月23~25日 東北大学川内北キャンパス

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉澤 千夏 (YOSHIZAWA Chinatsu)
上越教育大学・大学院学校教育研究科・准教授
研究者番号：10352593

(2) 研究分担者

上村 佳世子 (UEMURA Kayoko)
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号：70213395